1970 年代初頭における「セクシュアリティ概念」受容の諸相
―L.A.カーケンダールの「新しい性教育」を焦点に―

○柳園順子（姫路大学）

【問題の所在】

日本では戦後、政府主導により「家庭・学校・社会のあらゆる教育の場と仕組み」を通じて「純潔教育」の推進が図られ、社会教育では成人教育の婦人教育や家庭教育等で「純潔教育」が展開された（柳園 2015 他）。学校教育においては、1949 年の「中等学校保健計画実施要領（試案）」で「成熟期への到達」が示されるなど性教育の花がほころびかけるが、学校現場の強い抵抗等から性に関しては各教科に分散して指導することとなり、いくつかの学校で月経指導や性道徳の指導が「純潔教育」として実施されていた。1960 年代になると、子どもの身体発育の加速化、テレビ・ラジオ等の普及、性犯罪の増加や性解放の風潮から「純潔教育」不要論が議論されるようになり、文部省は 1972 年に「性教育と純潔教育は同義語」と示して学校教育の面では公的に「純潔教育」という用語を用いなくなる。これらはウーマンリブの流入による社会変化や性に対する関心の高まり等、時代の趨勢によるものでもあった。1970 年代初頭は政府主導の「純潔教育」からの脱却への過渡期といえ、同時期には学校保健界が介在しアメリカの性教育を摂取しようとする潮流も生まれる。本報告では、その指導者として登場した Kirkendall LA に眼差しを向け、アメリカの概念の移入が果たした機能を歴史的文脈から問う。

【本報告の課題と意義】

1964 年に SEICUS(Sex Information and Education Council of the United States：全米性情報教育協会)が設立し、「人間の性」をセクシュアリティという広い概念でとらえるとした。性に関する社会の関心の高まりから、学校保健界はこれまで消極的だった性教育を強化する方向へと転じ（村上 1972）、SEICUS 創始者 Kirkendall LA を迎えてアメリカにおける性教育の考え方を積極的に紹介した。Kirkendall LA は「新しい性教育」としてセクシュアリティの概念の導入を訴え、財団法人日本性教育協会（JASE）設立への期待を表明するなどしており、以後の日本の性教育の理解の仕方にも大きな影響を与える。これまでの研究の蓄積として Kirkendall LA の翻訳を担当した波多野（1972）による Kirkendall LA の性教育論についての分析や鹿間（2010）による活動の整理があるが、戦後の「純潔教育」との連続性及び性認識変容への影響の観点からの検討は十分になされてはいない。これらの解明は、日本の性教育の道筋を明らかにする上で意義あるものと考える。本報告では、1970 年前後の JASE 機関紙『現代性教育研究』、『学校保健研究』、Kirkendall LA の著書等を資料にアメリカの概念の移入過程をみることで、戦後の政府主導の「純潔教育」からセクシュアリティ概念を主体とした新たな性教育論への接続と後の性教育の主体的言説形成に果たした役割について明らかにする。

【考察】

Kirkendall LA は家庭生活の形態の変化と対比させ「新しい性教育」を論じ、家族関係学を主眼とする必要性やアメリカの現状から全ての先進国が新しい性の役割を確立していくことが急務と説く。その主張に対し、どのような見解のもとで何を摂取し、排除しながら、セクシュアリティの概念が受容されていくのかを中心に報告する。

【主要文献】

L.A. Kirkendall1972「現代社会における性教育の役割」日本性教育協会編『現代性教育研究』第 2 号♦L.A. Kirkendall 1972「学校性教育の基本的な考え方(解説)」学校保健研究 14(1) .16～26 ♦波多野 義郎 1972「L.A.カーケンダールの性教育論」東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・体育 (24). 164−177♦村上憲三 1972「性教育の歴史」平井信義編集代表『性教育指導事典』帝国地方行政学会.146−151♦鹿間久美子 2010『性の健康教育と養護教諭の役割～L.A カーケンダールの性教育論をもとにした理論と実践の研究～』考古堂

（キーワード：セクシュアリティ、Kirkendall LA、性教育）